

## Identifying predictive clinical characteristics of the treatment efficacy of mirtazapine monotherapy for major depressive disorder

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-01-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堤, 多可弘 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.20780/00032395">https://doi.org/10.20780/00032395</a>

## 学位論文の要約

Identifying predictive clinical characteristics of the treatment efficacy of mirtazapine monotherapy for major depressive disorder

「大うつ病性障害におけるミルタザピン単剤療法の有効性予測因子の研究」

東京女子医科大学大学院

内科系専攻精神医学分野

(指導：西村 勝治 教授)

堤 多可弘

Neuropsychiatric Disease and Treatment 2016:12、2533-2538 に掲載

### 【目的】

本研究では、新規抗うつ薬の一つであるミルタザピン単剤治療における有効性とその予測因子について検討することを目的とした。また副作用である過鎮静や、イライラ/不安症候群 (jitteriness and anxiety syndrome: JAS) の発現頻度も調査した。

### 【対象および方法】

東京女子医科大学病院神経精神科の外来において、2009年9月から2013年3月までに最初の抗うつ薬としてミルタザピンを投与された大うつ病性障害患者を対象として後方視的にカルテ調査を行った。有効性はClinical Global Impression scoreで評価し生物学因子や症状が治療予測因子になるかどうかを調べた。さらに過鎮静とJASによる中断率を調査した。

### 【結果】

ミルタザピン単剤による寛解率は36.8%だった。多変量解析の結果、自責感がない事 (odd ratio [OR] =0.15;95%CI [1.66-37.24], P=0.006) と制止症状があること (OR=4.30;

95%CI [1.30-16.60] ,P=0.016)が治療反応性に関連していた。副作用による中断率は鎮静が13.2%、JASが11.8%だった。

### 【考察】

ミルタザピンの有効性は36.8%であり過去の報告等とは矛盾しなかった。制止症状を伴ううつ病には、セロトニンやノルアドレナリン、ドパミンの受容体への作用が重要とされている。また自責感についてはセロトニン受容体への選択的な作用が重要と考えられている。ミルタザピンはセロトニン、ノルアドレナリン、ドパミンの受容体への作用を広く有するためこのような結果になったと考えられた。過鎮静の発現頻度は過去の報告等と矛盾しなかった。JASに関しては過去の報告では発現頻度が4%から65%と幅広かった。本研究はサンプルサイズが小さいため今後より多数の症例で検討する必要がある。

### 【結論】

大うつ病性障害において、自責感がない事と制止症状があることがミルタザピン単剤療法の有効性予測因子だった。今後、前方視的対照比較試験などにより、多数の症例で検討していく必要があると考えられる。